

仙譜  
 子集  
 卷一  
 初編  
 二

833-6



俳諧資料カード

年代	天保四癸巳
編者 (筆者)	一之
書名	仙譜子集卷一初編
備考	初編 =

(下垣内 蔵)





類題十萬句集初編箋之部目錄

箋之上

四

月初丁

郊

月

更

衣二丁

初

裕

三丁

裕

綿

紱

四丁

短

夜

青

簾

五丁

祭

鎬

祭

六丁

大

矢數

灌

弗

佛生會

花

御堂

七丁

箕

入

箕

籠

隻書

恹

蚊

帳

八丁

牡

丹

芍藥

十丁

杜

若

蜀

粟

十二

葵

丹

十五

立葵

著

莪

一

八

麥

炆

新

茶

十五

茶

挽草

覆

盆子

殘

花



若葉 葉柳 花卯木 九  
椶櫚花 常盤松落葉  
枳殼花 九三  
祕鱉 行々子 九  
通鴨 鰻牛 三  
水馬

若楓 葉櫻 桐花 蘇椿  
橘 箏 鱉 葭 切 九一  
鰻 九四  
蚊蠅

新樹 十七  
櫻實 茨花 茂花 落 時鳥 老鶯 枝蛙 蛟遣 九六

下窗 卯花 九  
柚 九  
松葉散 九一  
雙木立 蓴 鴈鳩 九八  
鶯音入 螢 子 九五

隻之中

五月 九六

藥の日

菖蒲酒 九九

入梅

竹醉日

五月晴

黑榮

辻ヶ花

隻羽織

百枝梅

菖蒲

早苗

苗配 四十七

紅花

萍

紫陽花

石菖 四九

雙菊

酸漿

百合 四八

金銀花

菱花

川骨

苗取

早乙女

花菖蒲

田植 四十五

草物 四四

競紅

隻月

帷子 四十三

五月雨 四十

梅雨

競馬

五月窗 四十二

藥玉

懺

五月

懺



合歡花  
柘花  
若竹  
蟬時雨  
鵲  
青

栗花  
推花  
今年竹  
鹿子  
水雞  
鵲舟  
鰲

檉花  
青梅  
初蟬  
羽拔鳥  
照射  
鵲繩

柿花  
氏花  
翡翠  
火串  
青嵐

六月  
土用  
鉞

水無月  
土用  
不二詣

水室  
虫  
五

暑  
祇園會  
雨

雲峰  
打井  
凉水  
冷汁  
草  
澤  
眼  
青  
櫻

扇  
掛香  
風薰  
納涼  
一夜酒  
水粉  
青田  
夕貝  
葎茂  
青芒  
氏

團扇  
盈寐  
竹婦人  
水賣  
水飯  
梅漬  
田州取  
盈貝  
八重葎  
青鬼灯  
茄子

汀水  
清  
簞  
葛水  
冷麥  
鮮  
蓮花  
撫子  
綿花  
麻  
真栗氏



宵凌

火取虫

川狩

隻果

隻海

七十四

葛荷茸

毛虫

冲繪

秋隣

隻川

七十三

紫蕨

蛭

御秋

隻山

隻題不知

百日紅

蚶

茅輪

隻野

類題十萬句集初編夏文部上

洞海舎凉谷編

一具菴一具校合

四月

山その一さうさるる四月春

冥ちや四月へ揚るるの味

桃さう神初るる四月式

ふ所時るる四月水

華張のさるる四月春

かえおる便さるる四月水

苔居るさるる四月水

薪水

文里

芝菜

海井

宇井

宇井

宇井



卯月

是處の山一ち四月が  
五歩に小袖穿る五月が  
芥崎の鬼のあつ四月が  
檀林の立花の四月が  
美名の運宅の四月が  
古橋の帯の四月が  
日北の帯の四月が  
薩摩のあつ四月が  
楠木屋の帯の四月が  
久々のあつ四月が  
雪雪の帯の四月が

雪雪の帯の四月が  
大梅  
貝谷  
一具  
雁臺  
蕉丘  
原谷  
山笑  
山笑  
山笑

更衣

任喜の松系四月が  
母の向片の四月が  
飯米の向片の四月が  
あつ四月が  
手袖の帯の四月が  
喜名の帯の四月が  
親の帯の四月が  
一衣の帯の四月が  
娘の帯の四月が  
お母の帯の四月が  
衣の帯の四月が

山笑  
山笑  
山笑  
山笑  
山笑  
山笑  
山笑  
山笑  
山笑  
山笑  
山笑



石奇 陶烟 松秀 露博 亭石 樓海 全雅 布席 湖月 高古

巾の寄附と席や更衣  
 更衣家と云うに記し中  
 程一交を云うに片々更衣  
 手掛も芳氏と云うに更衣  
 甚而二度行はるに更衣  
 何れ此と云うに更衣  
 衣と云うに二所の人や初袴  
 湯屋迄は袴をき物や初袴  
 俵に履くは一交を云うに初袴  
 出代の長巻留や一交の袴  
 衣と云うに芳氏と云うに

西相史古一兩一大久齊通  
海西子翠之荷陽梅藏







穀わやふちうね 林檎子  
 丹 新や素足る度のみ  
 青蘆 く付さうくも先代  
 雲々も精色うけりま 茅  
 片をくく 孝母あな 赤  
 松の葉のふと目もや青蘆  
 水く向けてゑろく 赤すも  
 萬葉のおく物床し 赤 蘆  
 庵の松をやあきとせ 赤すれ  
 三弦より下り けり 赤すれ  
 松枝く市く城く 赤 蘆

祖竹素素月松有松一八  
祖竹素素月松有松一八

祭

大矢數

筑上祭

灌佛

萩翁古詩よき病しす、  
 山依あり、屋敷や書、  
 親をけり生ぬ、秋の一人  
 大矢数あるまは、法成、  
 夢とも柿ノ、なり鶴梨  
 藤佛や名もあふ、ちの歌  
 藤仙や二人車、つゝ雲臥の  
 藤仙や人の足、くさかしの  
 藤仙や幾つ、あふる葉を  
 藤仙の日、ふらんや病上  
 藤仙や子供、お病も夢に

牛山 多女 榮望 素志 多女 道權 四集 多女 東止 租年 雜周



佛生會

廣仙より右より白子式  
廣仙や田舎も出る徳徳  
廣仙や夢にみる茶の苗  
廣仙や廣仙の家の日華  
山よりやうなる仙生會  
思ひ上臨張青人佛生會  
と一安の事やうなる仙生會  
兄よりやうなる仙生會  
子子の廣くや仙生會  
小あももやうなる仙生會

惟月 凍谷 全 登浦 柳美 芳谷 芳月 今 玄く 末く

花御堂

長入

第代の面影く仙生會  
花博のさうなる仙生會  
子を達てるの仙生會  
山よりやうなる仙生會  
極あももやうなる仙生會  
茶の角より仙生會  
山よりやうなる仙生會  
出よりやうなる仙生會  
花のさうなる仙生會  
兄よりやうなる仙生會  
小あももやうなる仙生會

而芳 石村 一水 以吉 涼谷 若帆 南石 椿海 田第 多よ女 不流







# 牡丹

手はくも四角は物産し牡丹  
 棟上の花を信ずる牡丹  
 山は花を信ずる牡丹  
 ちりしは花の信ずる牡丹  
 牡丹は花を信ずる牡丹  
 凡そ花を信ずる牡丹  
 手はくも四角は物産し牡丹  
 棟上の花を信ずる牡丹  
 山は花を信ずる牡丹  
 ちりしは花の信ずる牡丹  
 牡丹は花を信ずる牡丹  
 凡そ花を信ずる牡丹

一之 山笑  
 二之 山笑  
 三之 山笑  
 四之 山笑  
 五之 山笑  
 六之 山笑  
 七之 山笑  
 八之 山笑  
 九之 山笑  
 十之 山笑

手はくも四角は物産し牡丹  
 棟上の花を信ずる牡丹  
 山は花を信ずる牡丹  
 ちりしは花の信ずる牡丹  
 牡丹は花を信ずる牡丹  
 凡そ花を信ずる牡丹  
 手はくも四角は物産し牡丹  
 棟上の花を信ずる牡丹  
 山は花を信ずる牡丹  
 ちりしは花の信ずる牡丹  
 牡丹は花を信ずる牡丹  
 凡そ花を信ずる牡丹

一之 山笑  
 二之 山笑  
 三之 山笑  
 四之 山笑  
 五之 山笑  
 六之 山笑  
 七之 山笑  
 八之 山笑  
 九之 山笑  
 十之 山笑



日乳夢る所へ一輪風もあ  
 人の心も情も人嘆る牡丹  
 花春の二枝も牡丹  
 寒葉もあきも花も市人  
 袴も給仕出る所へ人  
 んよく市人散る白あかり  
 わる所のさるさきへ所へ人  
 扇持ぬも花もあきも市人  
 是れも市人よ切る所へ人  
 月影の影さきへ八重市人  
 山風の吹や牡丹の葉の葉

妙子  
 文子  
 富子  
 芳谷  
 右拳  
 松松  
 葛松  
 子松

まける方よ牡丹の葉の葉  
 元々もあきも市人  
 松松もあきも市人  
 華もあきも市人  
 毎日のさるさきへ牡丹  
 る上りもあきも市人  
 寒葉もあきも市人  
 切傍も市人の花も牡丹  
 妙子散る所へ人  
 梳灯もあきも市人  
 此家の名もあきも市人

云々  
 松秀  
 石符  
 吟露  
 涼谷  
 夕山  
 市人  
 宇人  
 何年  
 清和



芍藥

杜若

地味く名を載し居んが  
恙なく明くを著し杜若  
ありて杜若牡丹や大工  
芍薬や杜若の如く油  
芍薬やさきく惜美人号  
年よりね芍薬畑やちの依  
樹より截さる内や杜若  
二人く華一本や杜若  
杜若杜若這入やち家  
紫の山を雨なりくきく  
足はふあふあり杜若

栢樹  
待了  
蘇子  
薪水  
道雄  
多女  
一  
今  
菰和  
柳美  
嘉月

並ひ新若侍や杜若  
制れの例をくはや杜若  
車屋のとなりくは杜若  
杜若のや家鴨の如く杜若  
白くく手拭や杜若  
手を懸く杖や杜若  
二をく手より杜若  
助方刀より杜若  
唐中へ唐履杜若  
杜若の如く口より杜若  
う知くく年を空の栢樹

五  
荒航  
文俤  
酒好  
友  
初  
一  
松



子休あよるをきき杜若  
 子休あよるをきき杜若  
 人うはのくまをわけ杜若  
 杜若豆腐もほくも酒尻式  
 抱て来ぬの光やうまつも  
 何處をきき中へ杜若  
 一本うあの中をう知れも  
 一葉う程にるや杜若  
 杉の皮をききうまのき  
 兄付る里一うき杜若  
 まるもねるもうまのき

香露  
 香露  
 素心  
 大橋  
 古成  
 斗筲  
 多よ女  
 丁書  
 一具  
 一橋  
 雞園

若の中うきうき  
 ちうき月代利ね杜若  
 梨の本の葉うきうき  
 貧筆よあうき杜若  
 降方うきうき杜若  
 持の葉うきうき杜若  
 列の葉うきうき杜若  
 船の葉うきうき杜若  
 石の葉うきうき杜若  
 持の葉うきうき杜若  
 若戸川やうき杜若

香露  
 文島  
 多よ女  
 芳谷  
 作子  
 榮月  
 粗年  
 難墳  
 高の女  
 若戸



嚙栗

野崎や青くそ雲く杜若  
 井戸碧の餅を寄る杜若  
 湯よりや二ツ強きうまの味  
 舟路来る舟もみだり杜若  
 旅人君は雨の降くるまじきに  
 山内を物類しけしけしの花  
 手とりてのまゝ持て来りて  
 風吹ぬ夕秋言はれ女子の心  
 風月やとくとくも女子の心  
 嗚うちよ女子了れ思ふもあなね  
 近よむハ皆一帯に帝

五  
序  
况  
到  
旌  
亨  
象  
斗  
米  
夕  
山  
芝  
索  
竹  
煖  
若  
月  
每  
寸  
樓  
海

けし敷くやねに下し流  
あふもねや生るるも  
と物と持て集りて  
きのあはれけしとね  
あふやあはれと  
者達の實中けしの  
きしをわたり科を  
りれ等て丈夫と  
あふもねや  
けし敷くやねに下し流

出琴 道雄 素心 大梅 了手 古翠 多主女 双二 文倚 大宮 謝崇



けーちやふもかゝる和ふ  
けふよく実を満ちてうのぬ  
けふはけふはけふのぬ  
ぬ物とてふはけふのぬ  
ちりちりし雲もくけふのぬ  
けふのぬもくけふのぬ  
けふのぬもくけふのぬ  
けふのぬもくけふのぬ  
けふのぬもくけふのぬ  
けふのぬもくけふのぬ

唯嶺  
布席  
長衣  
桌平  
陶烟  
有水  
量山  
花甲  
笑語  
點果

常陸

葵  
立葵  
著莢  
一八  
麥秋

了の所は移して佛けの所  
葵の末ねおもふけの所  
多分てく迷越るけの所  
けの花月もくけの所  
けの花月もくけの所  
けの花月もくけの所  
けの花月もくけの所  
けの花月もくけの所  
けの花月もくけの所  
けの花月もくけの所

次峰  
涼台  
芦月  
面窓  
不庵  
一具  
唯嶺  
久藏  
點果  
葉月  
稻海







休庵よりおきてあるわきま  
常のよりききまふし  
これ懐く能くある光り  
堀川の守りあるわきま  
返り手はあふみ  
免る下はあふみ  
右たあもわきま  
と井はあふみ  
一林はあふみ  
文筆の儒はあふみ  
望の終はあふみ

衆懷

一南  
去集  
回  
公  
幼  
方  
為  
古  
鳳  
壽  
卷  
先  
陸  
半

伊太くも家の煙やわくも雨  
 既ききくすくおぬぬもあき  
 傳の上をんくもあきうけ  
 必あきくおのききぬわくも  
 既くもくすくあきぬわくも  
 法新あきのわけあきぬわくも  
 神の向は川のよけぬわくも  
 初あくとく附きぬわくも  
 稿人のききぬわくも  
 岸のわくもあきぬわくも

樓夢松萬永吉古涼久茅  
樓夢松萬永吉古涼久茅



若楓

秋風の吹くや  
人先の命も  
名苗も  
山中や  
生木も  
鳴るも  
名苗も  
人先の命も

一 葉  
子 輪  
蚕 浦  
二 直  
橘 海  
了 是  
雞 用  
多 女  
涼 谷

新樹  
木下閣

葉柳

葉櫻

ありあけの料理や  
下宿の  
名苗も  
山中や  
生木も  
鳴るも  
名苗も  
人先の命も

石 将  
芝 菜  
佐 翠  
野 菜  
左 女  
右 女  
自 岷  
面 女  
一 具  
其 菜



茶はくち尋常しるるに就て  
 おとくや舞衣は藤の香  
 梅や星をえんも春ぬ雲  
 茶はくちや雪ふりけさなるあう  
 茶梅や雨ふ降る作りと  
 茶はくち掃除意はくち  
 茶はくちと茶をうくる山家  
 茶安茶ゆき何れも梅の実  
 おのちの一重障や軒並む  
 おの花や雪ふりける月  
 くはくち明茶とまき又露

松東 篠山 笑語 施化 葛松 文呂 妹臺 榮徑 薪水 汀九 石竜

[illegible]

芳航  
 少魯  
 初之雅  
 正令  
 幼芝  
 方玳  
 丁知  
 夢居  
 崇乎  
 栢樹  
 八重女



柳の影はあけはる月影に  
 おの影や夕夢ぬ里もける掬子  
 うれそや雨の音もける掬子  
 住居よき花やおの影を寄る  
 柳の影は美人の影に  
 うれそや月影もける不二の山  
 おの影や雲の入境の柳の影  
 柳の影や雲の入境の柳の影  
 柳の影や雲の入境の柳の影  
 柳の影や雲の入境の柳の影

栗笑  
 如仙  
 花機  
 龍化  
 嵩山  
 金管  
 竹曲  
 踏床  
 氷谷  
 篠流

花野木

桐花

おの影も急なへ柱の影に  
 柳の影や夕夢ぬ里もける掬子  
 うれそや雨の音もける掬子  
 住居よき花やおの影を寄る  
 柳の影は美人の影に  
 うれそや月影もける不二の山  
 おの影や雲の入境の柳の影  
 柳の影や雲の入境の柳の影  
 柳の影や雲の入境の柳の影  
 柳の影や雲の入境の柳の影

大梅  
 久藏  
 幼蓮  
 一蕙  
 松怒  
 栢樹  
 文里  
 竹葉  
 大梅  
 松常  
 芝葉











橘  
花 檣

夏木立

橘や下屋をくく来夢會  
正あま白く雪くくくわきき  
糖の白く枝や枝をな木立  
雪の如きもきぬ山ゆくもな木立  
雪の如きもきぬ山ゆくもな木立  
雪の如きもきぬ山ゆくもな木立  
雪の如きもきぬ山ゆくもな木立  
雪の如きもきぬ山ゆくもな木立  
雪の如きもきぬ山ゆくもな木立  
雪の如きもきぬ山ゆくもな木立

新水 秋意 菊水 茶月 疎雪 芭蕉 陶烟 然泉 素有 乙亥

枳殼花  
箏

ふ山のそよよはくくやな木立  
おちくくくくくくくくくく  
箏を新きすくくくくく  
竹のそよや、掃よをくくくく  
竹のそよもくくくくくく  
箏を新きすくくくくく  
箏を新きすくくくくく  
箏を新きすくくくくく  
箏を新きすくくくくく  
箏を新きすくくくくく  
箏を新きすくくくくく

長春 布席 雪也 芦花 氷室 雨窗 田家 久藏 一具 小園 一樓



落 蓴 初 鮓

大倉の竹の子折や川向か  
竿の板より移る夕夕の  
うけたの竿身より一房の  
隙のものと見る様を櫓の  
ちややう人より一房の  
世の隙のきより一房の  
すけぬきは常の人や初  
万連のちより一房の  
初松魚より一房の  
一休のちより一房の  
神の身より一房の

山 嶺  
今 桂  
初 桂  
大 桂  
月 峴  
一 橋  
多 女  
耕 女

松 魚

松魚より一房の  
ちややう人より一房の  
世の隙のきより一房の  
すけぬきは常の人や初  
万連のちより一房の  
初松魚より一房の  
一休のちより一房の  
神の身より一房の

南 々  
雨 夕  
玄 々  
末 橋  
素 々  
素 々  
素 々  
素 々  
素 々  
素 々



郭公

庵丁も饅頭屋も月新だ  
 宵更や舞一重布きん  
 勝言や夢や詩も時を  
 手の入ぬ築山持る杜宇  
 客も来て去るも夢は時を  
 子親とも時を夢も時を  
 布きん時や夢も夢も夢  
 一夢も舟も夢も夢も夢  
 活ききん一夢も夢も夢  
 時を月と時との間より  
 夢も夢の夢も夢も夢

色  
 一  
 磯洋  
 一  
 夕山  
 素有  
 木司  
 面女  
 萬守  
 若月

布きん枕刀を枕も夢  
 十五夜も夢も一声夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢  
 夢も夢も夢も夢も夢

友之  
 斗玉  
 夢也  
 夢也  
 夢也  
 夢也  
 夢也  
 夢也  
 夢也  
 夢也  
 夢也  
 夢也



曉の薄闇傳わくく杜宇  
 市々きん五原ふ交野川武  
 子親田毎子影を掃く行  
 浮くあふ市人のくくあふ浮くあ  
 東もを山市々きん西も月  
 橋のあふも老いやあふ海  
 杜宇啼くく山を延くく電  
 急もくく二所のあふやあふきん  
 市々きん河あふも船のすを遠く  
 時を鳴りく加茂の市々桂  
 時を春のあふ来山武

椿海  
 大橋  
 方城  
 鷲宗  
 竹岫  
 紫花  
 西華  
 武  
 十

市々きん又あふくく曉の色  
 杜宇あふきんくく交野の声  
 一寸出くくあふくく時を  
 河あふのあふ後を来くく電  
 市々きんあふくく市々きん  
 東もを山市々きん西も月  
 橋のあふも老いやあふ海  
 杜宇啼くく山を延くく電  
 急もくく二所のあふやあふきん  
 市々きん河あふも船のすを遠く  
 時を鳴りく加茂の市々桂  
 時を春のあふ来山武

半太  
 氏拔  
 三平  
 鬼々  
 山  
 李察  
 了是  
 周慈  
 組中  
 椿海



森下六郎の案内や時を  
 横へまふ麓や杜宇  
 飯林のやまといふや市も  
 まくまゝ光陰やほろも  
 面垂の折敷屋をふれぬ  
 子親のつづくはのつづく  
 都以下流の少佐を初意  
 海へ柳のひさねや杜宇  
 一ふりておるゆゑ電時を  
 先傍の昔中おきてる魂  
 星彩をまきの光や都

八重女  
 點榮  
 扇花  
 妙子  
 信高  
 有紀  
 有徳  
 一橋  
 小園

歌々ねや雪井の時を  
 所作もまふふ飯屋や子親  
 世は連々先づくと杜宇  
 よんつととあはれと市も  
 人の欲するや毎日ふれぬ  
 時子や蓮田は雪毎うく  
 家福りの海へおるや杜宇  
 師もまゐる苗のまゐる  
 空ろまゐる初意をうや子親  
 市もまゐる飯屋の板を  
 市もまゐる飯屋の板を

鼎湖  
 子格  
 文海  
 青山  
 高安  
 松竹  
 芽谷  
 紀久子  
 大宮  
 春浦



荷 南 一 雁 美 出 荷 布 席

少子もなつて山あり  
 子もなつて山あり  
 十日より前も月松子親  
 妻のいゝいゝいゝいゝ  
 彼よけの云をををを  
 社やうの云の云の云  
 老々々押返り  
 眞人の枕の上や  
 昌魂二交目や  
 老ぬるゝ雲も  
 月と彼あり

阿兮 乃子 難獲 肅方 二丘 隸人 二晶 養翠 葵白 木席 小琴



鳴よりも花を急ぐや時を  
 以神を西より東よりあそぶ  
 うもを温泉の側よりや杜宇  
 家程の所より求む候と云  
 新に待てぬ故のあそびを  
 子子旅神のあそびや蜀魂  
 宿るやうなる神歌や時を  
 あつけの二粒候や子規  
 候と云ふ鳴や社の上り口  
 相急な女のと云ふ時を  
 明星の横はるやあそび

陸奥

井上  
 不曲  
 墨山  
 高山  
 古翠  
 蕉古  
 乙真  
 木架  
 扇花  
 乙桐  
 月峴

茶うその梅見付る時を  
 杜宇を建くや多も新に候  
 約木の多うぬきや用燕  
 麻子能て時を山手式  
 新の月集するやあそび  
 此の川より候やあそび  
 昔よりあそび候と云  
 三子程集はるや時を  
 庵の上の月立と云や時を  
 候と云ふあそびや子規  
 後う物するやあそび

全  
 松秀  
 全  
 原管  
 麻交  
 乙女  
 秋登  
 后和  
 以交  
 紫野  
 安



鳩

宵ふく我とみふそこの時を  
 今を不耳くしよしよ子親  
 りとけり天をみあんな時を  
 青雲の雲をみあんな時を  
 只ふ人おもふ多けりともあはれ  
 市をみあんな時をみあんな時を  
 九十の形も息もけりあんな時を  
 恒被く妙家様もあんな時を  
 山二の被くもあんな時を  
 山をみあんな時をみあんな時を  
 約被く龍光もあんな時を

新周  
 中志  
 如鳥  
 道雄  
 多女  
 一具  
 源岩  
 今  
 峰洋  
 素有  
 思文

萬々をよび行燈や 鳩  
 雲をみあんな時を  
 休くや 里く出く時 雲を  
 機をみあんな時を  
 市人のまを雲山やかんこを  
 雲の形の時をみあんな時を  
 市をみあんな時を  
 何んをみあんな時を  
 是をみあんな時を  
 雲をみあんな時を  
 雲をみあんな時を

甘谷  
 芭角  
 氏様  
 不忌  
 林堂  
 一花  
 素心  
 虎高  
 祖个  
 玉身



雲をたふしてさうなうと鳴るや  
 其のこゝろも鳴くや 雲をた  
 だ飛ぶさうに鳴くかよとの音  
 光解の伏案持て 雲をた  
 だひきつゝ来る桑名や 鷹飛  
 うんと鳴くや 叫ぶ程は落し  
 木石屋のあちかし 踏んで鷹飛  
 任のいのちをうつや 雲をた  
 うんあちすうと組板よくあち  
 鐘の音ゆづぬ里や 鷹飛  
 鈴の音よほ仕舞やうんと

山 荷 乙 雄 山 一 愛 今 雲 笑 布 席

[illegible]

出月

赤岸陳墟旭秋萬里峴



陸奧

五竹  
 雨竹  
 秋竹  
 一陽  
 雄嶺  
 禾木  
 美

鼓切

老鶯

新々子 尺五寸ハ 只一羽ノル  
近々六切ノ何々也 羽々子  
最々九寸ハ 羽々九羽ノ子  
け 交々々 其々々 羽々子  
夜切や 舟 振 羽々子 何々ハ  
す 初や 羽々子 羽々子 羽々子  
羽々子 羽々子 羽々子 羽々子  
羽々子 羽々子 羽々子 羽々子  
羽々子 羽々子 羽々子 羽々子  
羽々子 羽々子 羽々子 羽々子

青池 万里 不曲 星谷 松秀 檀芳 素慈 三平 貝省 白起 椿梅







山依の事々々世法中々々々  
 而の初の格々々々々々々々  
 爲何々の易廣々福々々々  
 つ書の月彙格り々々々々  
 裡々々々三々々々出々々々  
 殆陸の尺々々々々々々々々  
 元達の个々々々々々々々々  
 皆々々々々々何々々々々々々  
 一生々々々々格の何々々々  
 義々々々々々廻々々々々々々  
 何々々々々々何々々々々々々

氏枝 三平 桂裡 木木 古學 大貴 才在 然采 今 傳も 双二

廣々々出々々々々々々々々  
 上々々々々々々々々々々々々  
 好々々々々々々々々々々々々  
 回物々々々々々々々々々々  
 飛々々々々々々々々々々々々  
 傍々々々々々々々々々々々々  
 常々々々々々々々々々々々々  
 人々々々々々々々々々々々々  
 上々々々々々々々々々々々々  
 而十粒々々々々々々々々々  
 大々々々々々々々々々々々々

陸奥

出羽

諸島 荷乙 松菜 桃馬 若方 南山 貞雅 万理 有休 保山 古



[illegible]

四明

彦月 布席 素心 萬之 三平 松秀 名村 葛松 萬之 彦月







一具  
樓海  
史子  
對山  
唐年  
多子女  
芳信  
家藏  
今

二  
晶

卷之四

有水

點  
巢

陶淵

桑

益

曆交

上



中丁木林

人遊光

秋高よのそぬをうまれ松をた  
か家の中へくこきぬ松をた  
仲の上や島松をのひきぬ松  
下をうり強て舟の松をた  
松をたやひきぬ松をた  
く人うり強て舟の松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた

白起 祖平 雪山 田家 萬里 乙亥 葬母

〇元木

成續校

死心廿四

横をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた  
松をたやひきぬ松をた

右松 対山 石龍 友妻 二丘 古里 一室 竹菴 芳谷 森次

度



# 類題下萬句集

## 初編夏之部

類題十萬句集初編夏之部上終

類題十萬句集初編夏之部中

洞海舍涼谷編

一具菴一具校合

五月

凡夏の修く海吞五月れ

尾より布作の多ふ五月式

浮山木の爲なる海五月式

山木の爲なる海五月式

某よりやる此飛込某の中

某玉を戴くもの下某系

以てあるもの下某系

栗柿と斬の海をいふ成感

夕山

芝葉

常盤

御月

宿望

棠郊

其性

古城

藥日

菊王

幟



























旅人の暮るる處や草蒲対  
何れめは舟中を渡る常々  
新宅の暮るる處見ゆ草蒲が  
芳のきく人も暮るるやめめ  
一極新の館遠くあやめめ  
昔々といふも通る草蒲が  
渡りゆくやめ草蒲うへに  
投げてゆくや草蒲と成る所  
以て月を今も白くあやめめ  
兄あうや軒の草蒲を替へ  
替へては河やめ草蒲と通りけ

葉三  
石符  
素来  
玄々  
大極  
一重  
才  
子  
謝堂  
和

暮るる旅人の暮るる處や草蒲対  
何れめは舟中を渡る常々  
新宅の暮るる處見ゆ草蒲が  
芳のきく人も暮るるやめめ  
一極新の館遠くあやめめ  
昔々といふも通る草蒲が  
渡りゆくやめ草蒲うへに  
投げてゆくや草蒲と成る所  
以て月を今も白くあやめめ  
兄あうや軒の草蒲を替へ  
替へては河やめ草蒲と通りけ

葉三  
石符  
素来  
玄々  
大極  
一重  
才  
子  
謝堂  
和



菖蒲湯  
花菖蒲

田植

能き菖蒲やうきふ庭屋の傍うけ  
芳蘭局や左宮の傍も今も  
強家や唐屋の上のや菖蒲  
背流かきも身くちみかめ  
多飯を待つ世もさう田植  
大寸も月も来まき田植  
米五升借も市もの田植  
高人子物託も田う急  
田も植て凡の店に集うる  
便にさききききき田植  
兄う田も解して来き田植

一之  
吟  
五  
雅柳  
戴星  
酒好  
一甫  
田  
大梅

早

水糸壺や田植の形も先辨  
耕水て後提杜若も田植  
一うも田植もさう江戸の  
思ふも田を植付一月も  
膚も人の心も田うき  
さきききききき田植  
水物ももももも田植  
田一牧植も田植も  
庭もももももも田植  
君う代の杉や田植も  
あうももももも田植

一具  
金  
松道  
岐  
其  
丁  
里  
内  
如  
万  
橋







菱花 川宵

清くはるかに集うる菱の花  
 川宵や露よりくさる露の花  
 川宵のむらさきけ来家軒へ  
 川宵を他の花よりや命の中  
 川宵や石燈籠の傍にあり  
 是もまたうらなう人知のむ  
 ぬるや小梅の傍にあり  
 紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花  
 あはれや山の初めはふけり  
 紫陽花や露のうらなう花

山 雄  
 菰 和  
 稻 海  
 田 来  
 松 秀  
 二 立  
 涼 谷  
 年 延  
 松 秀  
 子 糖

紫陽花

紅花

百合

紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花  
 紫陽花や露のうらなう花

不 流  
 易 年  
 石 持  
 菊 花  
 ハ 朵  
 子 井  
 飛 得  
 煮 古  
 涼 谷  
 芝 菜  
 相 白



苔花

手のあつた命のけやあつた  
 あつたやあつたのけやあつた  
 苔のあつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた

四月 月 名 南 文 布 一 桃 松 青 知  
 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月

夏菊

石菖

酸漿

金銀花

合歡花

石菖のあつたあつたのあつたあつた  
 酸漿のあつたあつたのあつたあつた  
 金銀花のあつたあつたのあつたあつた  
 合歡花のあつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた  
 あつたあつたのあつたあつた

大 今 涼 栗 謝 多 一 双 野 弋  
 梅 春 谷 笑 堂 女 之 二 湖 山



荷女 素白 正合 史子 多毒 骨管 今 若月 二晶 點巢

栲花 栲花

初之雄 松秀 亮耕 確嶺 萬山美 麻衣 初之雄 高安 以吉 其形 白起

樵花

青梅



## 凡花

竹葉花立て能くもさう凡花も  
 凡花の香にさうさう月夜に  
 白牡丹や凡花に押されてあるは  
 凡花は庭一帯の月夜に  
 わく凡花はさうさうや秋夜に  
 上り凡花はさうさうや秋夜に  
 凡花のおくや秋夜の星を  
 わく凡花はさうさうや秋夜に  
 凡花の香にさうさうや秋夜に  
 わく凡花はさうさうや秋夜に

方城  
 里村  
 麻衣  
 衣面  
 祖中  
 文海  
 竹毛  
 耕安  
 有下  
 篠流  
 文廣

## 今年竹

凡花や凡花も秋の二つさう  
 わく凡花はさうさうや秋夜に  
 凡花の香にさうさうや秋夜に  
 凡花のおくや秋夜の星を  
 わく凡花はさうさうや秋夜に  
 凡花の香にさうさうや秋夜に  
 わく凡花はさうさうや秋夜に

方城  
 麻衣  
 友之  
 梅雪  
 文和  
 高女  
 子鶴  
 舞母  
 其之  
 雲堂

## 初蟬







蟬時雨  
鹿子

蟬の時中々々々やまを  
井戸端の草履時や蟬の時  
草履の時草履をすや蟬の時  
蟬の時や草履をすや蟬の時  
二時々々々々何や蟬の時  
くくくくすや蟬の時  
柿栗をすや蟬の時  
蟬人のほおそり草履の時  
蟬々々々々々々々々々々々  
蟬人のよけや蟬の時  
蟬々々々々々々々々々々々

乙 貞  
招 出  
正 令  
屋 角  
時 子  
ハ 桑  
五 峴  
一 寄  
夕 山  
唐 雨  
梅 海

蟬の時中々々々やまを  
井戸端の草履時や蟬の時  
草履の時草履をすや蟬の時  
蟬の時や草履をすや蟬の時  
二時々々々々何や蟬の時  
くくくくすや蟬の時  
柿栗をすや蟬の時  
蟬人のほおそり草履の時  
蟬々々々々々々々々々々々  
蟬人のよけや蟬の時  
蟬々々々々々々々々々々々

五 聖  
若 帆  
一 甫  
回 華  
全 象  
雪 象  
雅 嶺  
雲 美  
陶 烟  
月 岫  
床 浩







鵲飼  
火串  
照射  
鳴浮巢

有鵲飼有や年長程も侍  
井戸底の稻四五株も喰ふ鵲  
又方をもとめハ喰ふか  
有枯く喰ふす程に喰ふ鵲  
又湯と湯と這入一有鵲  
鵲羊も面々喰ふの侍も  
侍も侍と有鵲中を侍も  
通ふも有鵲中を侍も  
面々来ふも有鵲中を侍も  
有鵲中を侍も有鵲中を侍も  
有鵲中を侍も有鵲中を侍も

十  
与  
多  
如  
幻  
玉  
一  
松  
杜  
生  
桂  
裡

青嵐

有鵲飼有や年長程も侍  
井戸底の稻四五株も喰ふ鵲  
又方をもとめハ喰ふか  
有枯く喰ふす程に喰ふ鵲  
又湯と湯と這入一有鵲  
鵲羊も面々喰ふの侍も  
侍も侍と有鵲中を侍も  
通ふも有鵲中を侍も  
面々来ふも有鵲中を侍も  
有鵲中を侍も有鵲中を侍も  
有鵲中を侍も有鵲中を侍も

青  
其  
四  
全  
万  
石  
玄  
古  
巢  
生



高止し

鯨

半雪の夢寐ふりり  
高止しや実のなる所戸口  
まきしーの歌を子来て高止か  
蘇夢の高きうー金くれ  
蘇夢や気味く(流)雷の度

篠 竹  
和琴  
松秀  
初之雄

類題十萬句集初編度之部中終

類題十萬句集初編度之部下

洞海舎凉谷編

一具菴一具校合

六月

うーや探よきうーる井の家

麻交

六月の雨れ中へ空上川

一具

うーやうーく(中)雪の海五

多よ女

六月や露をそりく襟の元

荷堂

六月の松渡くまゆーこれ

鼎湖

氷無月

み雪月や家毎まきる庭の松

一甫

氷毎月も露の上の夕々な

う海

氷室

氷くも雪の探よく氷室へ

豪花



暑

女童の氷室のえくぬきぬ  
 山くのはる暑き仕切あり  
 晴るもあつた植樹の暑くぬ  
 けよ戸をきく暑きぬ暑きぬ  
 暑きぬや金持の傍の山くぬ  
 可太と暑きぬする暑きぬ  
 博の芳乳あつと暑きぬ暑きぬ  
 暑きぬく暑きぬの暑きぬ  
 ちくく山くぬの暑きぬ  
 暑きぬやきくぬ尾膏  
 戸をきく暑きぬ暑きぬ

久 飛  
 一 鰯  
 芝 菜  
 竹 菜  
 二 丘  
 吟 庭  
 素 束  
 暑 笠  
 田 菜  
 全 成  
 右 成

女童の氷室のえくぬきぬ  
 山くのはる暑き仕切あり  
 晴るもあつた植樹の暑くぬ  
 けよ戸をきく暑きぬ暑きぬ  
 暑きぬや金持の傍の山くぬ  
 可太と暑きぬする暑きぬ  
 博の芳乳あつと暑きぬ暑きぬ  
 暑きぬく暑きぬの暑きぬ  
 ちくく山くぬの暑きぬ  
 暑きぬやきくぬ尾膏  
 戸をきく暑きぬ暑きぬ

杉 秀  
 五 叶  
 多 女  
 一 具  
 葉 鈴  
 一 浦  
 大 宮  
 大 梅  
 大 中  
 大 女  
 杉 秀



土用

山吹の雲を移し通し果てぬ  
 一里程先より和める暑さ角  
 山は紅い啼鳥の切に和れ  
 隣りへ響く物草の和れ  
 刀屋と近付く和れ  
 松の木の和れ  
 素麺の肴の和れ  
 大夢の和れ  
 赤い和れ  
 須く和れ  
 何の和れ

石花 尾山 夕山 河元 芳帆 友之 田兼 二糸 素心 木木

虫丁

血の付ぬきの和れ  
 赤い和れ  
 赤い和れ  
 赤い和れ  
 赤い和れ  
 赤い和れ  
 赤い和れ  
 赤い和れ  
 赤い和れ  
 赤い和れ

松秀 多女 谷後 松月 桂程 一甫 雅柳 松秀

祇園會

鉾

不二詣



夕立

五月の夏の終りやふ二情  
雨雲の中を流るゝふ二情  
富士の峰を穿つゝふ二情  
人鬼も此世の常やふ二情  
夕立やあはれはせし方ね  
夕立や男の子の由縁  
夕立や母の心づき  
夕立や山崎の山崎  
夕立や出羽の山崎

一具  
鳥家  
雄嶺  
月峴  
雅柳  
文和  
節三  
田集  
桂理  
多女

夏

夕立や暮一疋の月通す  
夕立や情のあはれ推の下  
夕立の情を来しとわが  
夕立や心を切る者ある者  
夕立や情を切る者ある者  
夕立や情を切る者ある者  
夕立や情を切る者ある者  
夕立や情を切る者ある者  
夕立や情を切る者ある者  
夕立や情を切る者ある者

松雲  
瓶乙  
強平  
吟雲  
涼雲  
文俚  
後南  
多女  
女  
如平  
永



# 雨

雨乞

雲峯

何処やうも夕暮りて風の来  
 夕暮の晴て暮るる雨に  
 六條や夕暮りて人通り  
 夕暮ややうきと暮るる夕  
 夕暮りて夕暮りて夕暮り  
 雨をや濡るる夕暮の夕  
 雨をや濡るる夕暮の夕  
 雨をや濡るる夕暮の夕  
 雨をや濡るる夕暮の夕  
 雨をや濡るる夕暮の夕  
 雨をや濡るる夕暮の夕

月 涼 今 久 稻 八 芝 素 荷 芦 蓮  
 月 涼 今 久 稻 八 芝 素 荷 芦 蓮

# 扇

扇

扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇  
 扇を扇て扇て扇て扇て扇

月 涼 今 久 稻 八 芝 素 荷 芦 蓮  
 月 涼 今 久 稻 八 芝 素 荷 芦 蓮



市廛

二五

衰

極部より凡そけりて此の扇の形  
 様は是より手玉佐傳の扇のれ  
 以てけりや扇を杖に據の上  
 子に差して人のをさふ扇の形  
 白雲を傳へんと地の扇の形  
 かさゝかゝるは舟板の扇の  
 形の扇を杖に據る扇の形  
 接ぎのてゝを傳へる扇の形  
 佐傳の扇の形を杖に據る扇の形  
 扇の形は下戸の形を杖に據る扇の形  
 昔の扇の形を杖に據る扇の形

多







夏府屋の物より金屋水に  
結貨物のまふ府より山屋の  
前計し山屋ののきより  
振るも山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
一本の柳より山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
一里の山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の

雨様  
岸山  
九曜  
李冥  
相  
荷  
雅  
布  
雅  
阿  
松

歩水

風薫

子外の金屋水に  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の  
山屋の山屋の山屋の山屋の

吟  
戴  
方  
墨  
乙  
民  
夢  
熊  
雄  
葉











氷賣

川端くちく思ふやすき  
波枕より此より瓦屋み舟  
夕涼椅をもちけりや  
万遠くへふれを吞す  
此より西より東へ  
水物元の柳打つるす  
向ふ河毛をけり  
足さくはき通ひや  
川柳く終任の通ふ  
つすみ云葉書  
氷賣きりや不二

粗  
雲  
栗  
二晶  
新  
以  
乃  
お  
去  
松  
陶  
調

葛水

心太

一夜酒

度

葛水より一斗の酒  
様より風上へ  
橋より水より  
船人より  
世より  
舟より  
舟中より  
旅人の  
宴より  
舟人より

陸奥  
山  
二丘  
萬  
龍  
永  
有  
乃  
不



葛城の神、新島の一杉、  
手枕の甲斐、河津の一本松、  
修善寺の手本、湯田の一本松、  
三好や、初めの山梨、  
高尾や、普賢堂の中の大杉、  
雪舟子、菅原の山梨、  
その杉のくも、  
梅屋や一切、  
杉の子を二重、  
割る方を、  
新島に、

永年  
陶烟  
花甲  
寶喬  
萬壽  
粟笑  
有冰  
冰楚  
松常  
萬壽  
雞周

青田

夢の夢の宛 予は達し 夢はこれ  
飛くよ 夢は 夢の夢の夢の夢 我

真伯  
雄夫

舟んはあんなに走るやうに  
走らぬやうに乾いたのち  
乾いたのち

丁 桂芳女

萬石下兄世所何事書田式

旅園

一物を予輜りゆふ喜回武

改書女

萬年富貴の極うれ

布席

上之修実の面々々々々々

鳴

新の智の喜田を居る戸口に於

聯山

力 爲 卷 上 第 二 十 五 回 式

白起

學子得之於心

惟

田草取

其







字。應。雨。荷。芳。東。一。何。年。八。月。月。月。

益貞

鬼令 傲平 不上 庚年 二五 孔自 惠子 應面 每才 布席

撫子



出

松鳴 葛松 丈二 落葉 捲簾 雨淋 稚童 踏雪 七老 八朵

綿花 青芦 青芒 青鬼灯

麻

纓麻

排灯の明を初め麻のく  
枝川の麻の葉紙の星々の  
麻汁は子をも信りし舟より  
面拂て送るにけり麻  
凡少敷き多餅の大団圓を智  
多きの戸や凡をよめる写し物  
凡ちやとちり憐れもさ林  
凡一の娘はあそびんが喜ぶ  
ありしの夢を見ずや凡島  
凡あつても娘の料理の手際だ  
切て出らん世々々女学院先

茅麓 量山 素心 携海 一之 東止 友之 二丘 松秀



荷乙  
布席  
不申  
慈泉  
吟霞  
東樗  
葛之

常

五

真來此

二田松  
丘華秀

全

子

寧壽

獲麟

手  
粘

壯賞

本公

卷之五

度

凌霄 茗荷茸 紫蘗 百日紅 火取虫

蘇子世孫之



毛虫

蛭

川狩

学あゝ〜  
 三ッ木あゝ〜  
 是あゝ〜  
 新あゝ〜  
 宜あゝ〜  
 峯あゝ〜  
 本あゝ〜  
 山あゝ〜  
 陸あゝ〜  
 相あゝ〜  
 川狩あゝ〜

木  
 小  
 田  
 新  
 然  
 古  
 ち  
 一  
 月  
 芦

沖鰐

御杖

川あゝ〜  
 川あゝ〜  
 川あゝ〜  
 川あゝ〜  
 仲あゝ〜  
 茅あゝ〜  
 橋あゝ〜  
 中あゝ〜  
 中あゝ〜

田  
 一  
 小  
 信  
 英  
 月  
 一  
 夕



蘇三 水仙 陶烟 萬子 有一 嘉松 嘉榮 芝葵 大梅 萬子

夏杲

姊妹

秋近

夏山

夏野

夏海

湖月  
弄琴  
棋海  
於今  
抱琴  
雁望  
立况  
於今  
仙  
雁嶺



# 東鑑

度題不知

修竹より花より風と事多し

甫

青くとも名の字はよ龍田川

一

唐壁や新あつたのなみ

文海

人の為と依りて名の木新が

相宜

友新やち唐の末を甲の室

達

寄此書のかくしき事多し

和

昭光をのちもせしありあつた

金

蹄文をん君や日初のくもを

何

夕立の晴るる君や初をん

金

林檎の垣をのちもせし

文

外字の中にもととととと

子

博教をのちもせし

金

山畑や面をのちもせし

金

赤い鳥をのちもせし

華二

ふりて町中をのちもせし

華

松をのちもせし

美

後之の庭をのちもせし

金

蒼くれり書をのちもせし

来

瑞くは月をのちもせし

金

石をのちもせし

石



大和乃

夕雲のむすめや廣小路  
 至松茸や飯ふり肉を以て所  
 とくはや綱を幾世を承傳  
 ち移歩の望みぬの上や去来  
 ちよつくと母を思ふ人慕子  
 伯父も子供は出る四柱うね  
 私の花日中北面の陣うん  
 をとる血砂流しあひ是うれ  
 初より譽をえん菴のそとみ  
 儀の所も春まゝや雪水  
 ちよつと雪飛出人か風車

全 全 來 全 幸 全 全 也 全 全 柯  
 六 仁 雅

傳。 人の癖も我々の  
 存ありは来未初丹や未とま  
 夢中と云ふ短交初と云ふ  
 川初やと云ふ供や且那や  
 亦や若くはと云ふと云ふ  
 大排や疎をすてと云ふと云ふ  
 喰ひ赤く作天と云ふと云ふ  
 有鬼の二交月と云ふと云ふ  
 隣と云ふと云ふと云ふと云ふ  
 月何をもと云ふと云ふと云ふ  
 女をと云ふと云ふと云ふと云ふ

之  
也 今 今 柯  
難 亨

今 今 葉 美 今 今  
封 峰







